

## 臨床教育プログラムとしてのサービス・ラーニングの展開

— キリスト教精神の浸透と具現化を求めて —

土橋 敏良

キーワード：サービス・ラーニング、キリスト教、学而事人（Learning and Labor）、人格形成、心的成長、市民性育成

### 概要

本学の入学式そして学位授与式で読まれる聖書は、「**人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。**」（マタイ 7：12）という言葉である。これこそ聖書であるという意味でこの教訓は「黄金律」であり、山上の説教の一節というよりその全体の結論であるとし、積極的生き方こそ聖書の神髄であると強調している。

イエス時代の著名なファリサイ人ヒレルは、この教訓を消極的な形で「あなたが嫌いなことは人にもするな」と教えた。孔子にもヒレルと同様の教訓がある。しかし、愛は消極性を超えなければならない。それが本学園の創立者・清水安三の教育理念“Learning and Labor (学而事人)”そのものであり、本学の底流に連綿と息づいている学風でもある。我々は創立者を偶像化するのではなく、その建学の精神を新たな時代環境に適応させ、具現化させていくことが求められよう。

現在チャプレン室が取り組んでいる「サービス・ラーニング」という体験型教育実践の手法を、建学の精神に基づく人格形成教育の一環としてこれを捉えていくなれば、「学而事人」、学びて奉仕するオビリンナーとしての生き方の体得を目指すものとなる。

現代の就職難を背景に、あらゆる大学が学生の実践的な就職支援を展開している。スーツの着こなし方から立ち居振る舞いなど、会社訪問時の好印象づくりから書類の書き方に至るまで懸命の対策が繰り広げられている。だが、大学関係者が口をそろえるのは「最終的には社会性」である。世間に出て通用する中身・精神性を養えるかどうかを正否を分ける。そのような古くて新しい課題が全入時代にいっそう重く我々にのしかかっている。

キリスト教主義大学として、学生の人格形成と市民性育成の課題に、具体的にどのようなプログラムをもって関わっていくのか。試行錯誤を経ながらではあるが、チャプレン室の実践的な取り組みを紹介しつつ、理論的な枠組みと今後の課題も交えて論述したい。

## 1. はじめに

### 1.1 キリスト教主義教育における人格形成

マーティン・ルーサー・キング牧師は、有名な「私には夢がある (I have a dream)」の演説の中で「すべてのアメリカ人が肌の色ではなく、その人の人格によって判断される日がくることを夢見ている」と語った。キリスト教主義教育における「人格」という概念は、基本的人権に関連するような意味での人格ではなく、むしろ、誠実、正義、勇気、思いやりなどを含む「品性」あるいは「品格」を問うている。個人の人格を尊重し、また同時に個人の責任を明らかにするという基礎的な観念の問題でもある。この人格が学生たちの内面に形成され、精神的な血となり肉となることを願いつつ、人格形成教育はなされていく。キリスト教主義教育がなぜそこにコミットするのかと言えば、それは人格というものが人間性の根本にあるものであって、人間の働きではないからである。いわば人間を人間たらしめている根本であるから、人格の存在を認識し、人格の尊厳を自覚する意識というものは、本来これは宗教的なものであると考えるからである。そのような宗教的人間観に立脚しながら、キリスト教主義の浸透を図るために、本学園においても中期目標の柱を掲げながら具体的な取り組みへの努力が払われているが、これらの計画や方策が大学の具体的な教育状況と密接に結びついて行われているかどうかを顧慮しなければならない。さもなければ、学内における「キリスト教主義」が特別な存在として孤立してしまい、大学全体の教育活動との脈絡が稀薄になってしまう恐れがある。キリスト教主義大学において宗教的価値観が活き活きと働いている状態であることが何よりも重要であるが、今日の実況は、まだそのような理念が十分に具現化・活性化されているとは言いきれない。

### 1.2 サービス・ラーニングの導入

そのような現代のキリスト教主義大学をめぐる事情を背景にして、「サービス・ラーニング (Service-Learning)」という教育手法が注目されている。すなわち大学キャンパスにおける日常のアカデミック領域とコミュニティ・サービスや国際協力活動等を積極的かつ有機的に連携させながら、宗教的教育理念に基づく人格形成をより意識的に行おうとする複合的な教育コンポーネントである。サービス・ラーニングは、米国においては1970年代後半以降、アジアの諸大学においても2000年代以降注目を集め、急速な展開を見せている。日本でも多くの大学でサービス・ラーニングをカリキュラムに取り入れ始めているが、実践例はまだ多くはない。混迷する時代の新しいアカデミック・スタイルとして期待されているが、とりわけキリスト教主義大学におけるサービス・ラーニングは、その教育理念を具体的にイメージするものとして、またキャンパス・ミニストリー (学生生活の個人的、霊的、社会的次元について学び、体験し、内省する多くの機会を提供するために

なされるキリスト教信仰に基づいた諸活動)に新たな可能性を提供する問題提起型学習プログラムとして着目されている。本稿においては、その理論的考察と教育的効果並びに本学のチャプレン室(学校で働く牧師が所属しており、様々な式典、学校礼拝並びに宗教教育活動や相談業務を担っている)における適用と展開の三つの観点から論述してみたい。チャプレン室主催のプログラムは第5節で紹介をするが、例年、夏休みと春休みの期間中に「ワークキャンプ」の名称で実施してきた。取り組みの中で浮かび上がってきた課題を整理しながら、新しい教育実践の道筋を模索してみたいと思う。

## 2. サービス・ラーニングのフレームワーク

ボランティア活動は、原則として無報酬性、公共性、公益性を旨としたボランタリーな活動であって、活動者の主体性が最大限に尊重されることの市民による他者へのサービス提供活動である。それに対してサービス・ラーニングは、奉仕活動やボランティア活動のもつ社会的役割や教育力を活用して、学生が大学で学んだ成果を地域社会の諸問題の解決のために役立て、そのことを通して大学で学ぶことの意味を再確認するもので、「学問の検証と社会還元との相互的实践型教育」である。〈図1〉に示すフレームワークのようにサービス・ラーニングは、①奉仕分野の理論的理解→②奉仕実践→③実践後既存知識の検証と見直し→④現場から見た新しい理論の可能性の検討、という複合的な構造をもっている。学生は様々な機関で相当の期間奉仕活動を行い、その経験から学んだことを整理・分析して発表し報告書を作成する。本学チャプレン室が主催して実施しているサービス・ラーニングの特長は、実際の奉仕体験から学んだことを自ら振り返り、自分の心と知識に取込んでいく「リフレクション(省察)」という心的成長過程を特に重視する点にある。

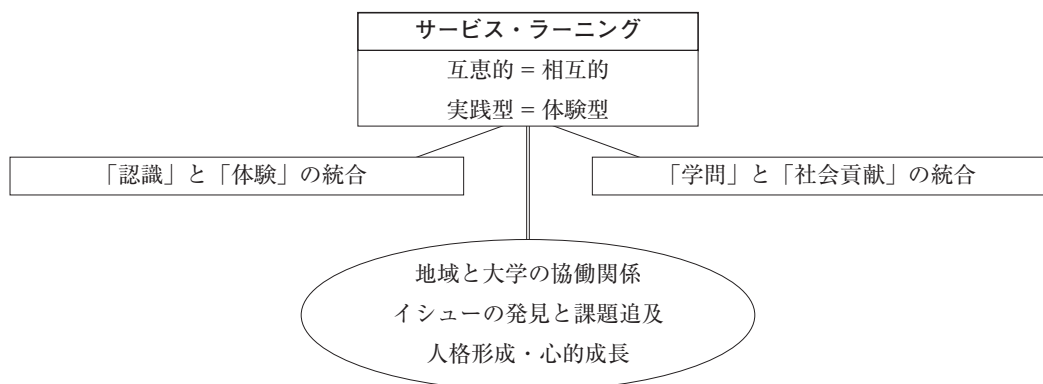


図1 サービス・ラーニングのフレームワーク

### 3. サービス・ラーニングのコンセプト

サービス・ラーニングは従来のボランティア活動などのように、提供する側からの一方的な奉仕活動（サービス）だけではなく、奉仕活動を通してそれを受ける側から、または活動自体から学ぶ（ラーニング）という双方向的要素が大きな特徴である。この点で、「サービス」を強調するボランティアやコミュニティ・サービスとも異なり、また「ラーニング」を強調するフィールドスタディ（実地研究）やインターンシップとも異なるのである。これを図示すると<図2>のようになる。



図2 サービス・ラーニングのコンセプト

### 4. サービス・ラーニングにおけるリフレクション

サービス・ラーニングは、大学で得た知識や取り扱われる「理論」と現場（コミュニティ）で得た「体験」との間を結んでいく作業（リフレクション）に重点が置かれる点で、従来のボランティア活動よりも知的性格が強い。

リフレクションの具体的なあり方については、次のように概観することが出来る。

#### (1) リフレクション（省察・振り返り）

- ①実際のサービス活動の間にしたこと、聞いたこと、考えたり、話したり、書いたりする活動を通し、しっかりと振り返ることのできる時間を確保する。  
チャプレン室では、毎日の就寝前の1時間をこれにあてている。
- ②社会活動そのものより、社会活動の振り返りから学ぶことの方が多い。  
サービス・ラーニングから何を学んだかは、誰かが決められるものではないし、決めつけることもできない。ファシリテーターが「今回はこんなことを学びましたね」などと意味づけてはならない。学生たちのリフレクションでの気づきとずれていた場合には「価値判断の押しつけ」となってしまうからである。
- ③プログラムの各段階を有機的に結び付けることが大切である。しかし注意しなければならないことは、プログラムのパッケージ化である。それにより価値判断の押しつけを助長する危険性が高まってしまう。

## (2) リフレクションの具体的な流れ

リフレクションは以下の事柄を内省したり、言葉にしたり、表現することである。従来のボランティア活動などでは、振り返りの機会が確保されていたとしても、個人的な感想を述べる程度で終始する場合がほとんどであり、「リフレクション」を習得する機会が十分にはなかった。「リフレクションのための時間」を予め設定しておくことが大前提となる。

- ①奉仕体験終了後、自らがどのような体験をしたのか、体験の中でどのようなダイナミズムが起こっていたかを（まずは評価を気にせずに）記述的に吟味する。
- ②体験の中で起こったことは、何故起こったのかを考察する。
- ③同時にそこで気付いたこと思ったこと、感じたことが何であるかを確認する。
- ④体験から何を学んだのかを明らかにする。
- ⑤そうした学びから、今後の自分/集団の課題や目標を明らかにする。

## (3) リフレクションの4つの鍵 (4C's)

- ①関連性 (Connecting) : 地域の状況・ニーズ等、関連課題を学習する。  
リサーチ・クエスチョン→自分の取組みをオフィシャルな空間で語るための準備である。
- ②継続性 (Continuous) : 日々のジャーナル (日誌)、アカデミック・レポートを作成しておく。→それにより学び全体のトーンが整う。
- ③挑戦的 (Challenging) : プレゼンテーション→言語化を通じた意識化を進める。
- ④文脈化 (Contextualizing) : 企画提案・フィードバックの実施→現場以外の学習活動を社会的な営みへと発展させる。

こうした一連の取り組みの中で、予め決まった結論はなく、個々それぞれに結論があるというマルチ・エンディング・ストーリーの学びを実現することによって、「自己/他者/世界」の関係が豊かに編み出されていくことになる。

## 5. 教室を出て、社会が学びの場になる (Serving by Learning, Learning by Serving)

チャプレン室では現在、栃木県西那須野にある学校法人「アジア学院」(アジア農村指導者要請専門学校)、伊豆大島にある社会福祉法人「藤倉学園」、東京八王子にある NPO 法人「日本エコクラブ」の3箇所を奉仕体験の場として設定している。

アジア学院は、1973年に設立された国際人材養成機関であり、アジア・アフリカなどの農村地域の民間開発団体 (NGO) から、その土地に根を張り、その土地の人々と共に働く“草の根”の農村開発従事者を学生として招き、自国のコミュニティの自立を共に目

指す指導者を養成している。9ヶ月間にわたる研修では、栃木県那須塩原のキャンパスに  
およそ30名の男女が集い、価値観等それぞれの違いを尊重し、公正で平和な社会実現の  
ために、実践的な学びを行っている。海外学生の渡航費、研修費はほぼ全額、支援者なら  
びに団体の寄付によってまかなわれている。

藤倉学園は、1919年に設立された知的障がい者援護施設（入所更生）であり、教育的  
治療法を特長とした日本でも数少ない成人入所施設である。ノーマライゼーション（障が  
い者と健常者とは、お互いが特別に区別されることなく社会生活を共にするのが正常なこ  
とであり、本来の望ましい姿であるとする考え方）からエンパワメント（個人や集団が自  
分の人生の主人公となれるように力をつけて、自分自身の生活や環境をよりコントロール  
できるようにしていくこと）を重視する社会環境の変化に伴い、個別支援の充実や支援の  
多様化という課題を抱えつつ、2008年より国の自活訓練事業を展開し、知的障がい者の  
就労移行支援にも積極的に取り組んでいる。株式会社フジクラの財政支援を受けつつ、年  
間を通じて800人～1000人ほどの奉仕活動者を受け入れている。

日本エコクラブは、2001年に特定非営利活動法人（NPO）法人として認証を受けた。

「自然を楽しく創造的に遊ぶ」をテーマに、自然環境への敬意と感謝が育まれる学びの  
場を作り出していくことによって人と自然とが調和する地域興しを実践し、21世紀の日  
本の国づくりや地球環境に直接的に貢献する団体となることを目的としている。森林保護  
を目的とした炭焼き塾の実施や、「余暇」のサポートとして、「遊び場」「体験場」「癒し場」  
「焚き火場」を提供すると共に、環境教育普及啓発活動を行い、各教育機関の環境教育実  
習のフィールドも提供している。

ジョン・デューイは、民主主義の社会は、多様な人々が共に暮らす生き方の哲学が具現  
化したものであると述べているが、事実、社会の中で孤立して生きていける命など存在し  
ない。けれども、社会を学問的にどれだけ精緻に分析しても、それだけでは人間の人格を  
創造的に形成していくことは出来ない。この場合の「社会」とは、広く（自分とは異質な）  
他者、マイノリティやマージナルマン（周縁人）、文化資本・経済資本などを十分にもた  
ないと言われる地域の人々なども含まれる。さらには自分の思い通りにならない他者、自  
分と同じように考え同じように行動するとは限らない他者、そのようなコンテクストを摺  
り合わせにくい他者との間に実際に人間関係を構築し、「対話と交流」を行っていくこと  
が極めて重要なテーマとなるのである。

## 6. 学生への効果

サービス・ラーニングによって最終的に獲得されるスキルとして、次の4項目を想定することができる。

(1) 学究意欲〈Academic Motivation〉

学習意欲の向上、技術向上の契機、社会情勢・異文化・自然・文化理解、生涯学習

(2) 社会参加〈Social Engagement〉

社会意識向上、社会的コミットメント、デモクラシー、市民意識、情報活用力、倫理観、平和創造、愛と癒し

(3) 人的熟練と能力〈Human Skills & Abilities〉

コミュニケーション能力、問題解決能力、自己抑制、チームワーク、自立心、リーダーシップ、キャリア開発、自己探求

(4) 新たな観点〈New Perspectives〉

論理的思考、創造性、批判的思考力、社会的責任、公共精神、共同体形成、奉仕、敬虔、ファシリテーション能力、マネジメント能力

公共精神や市民意識の育成は、倫理的な議論や理論的な講義を展開するに止まらず、私は誰なのか、私は何をしようとしているのか、どうやってそれをするのかという課題追求をする方が、感受性の高い学生たちには強い影響を与え遙かに効果的である。

アメリカでは過去十年にサービス・ラーニングの効果についての研究が数多くなされており、サービス・ラーニングの参加者の意識、参加後の学業の取り組み、学業成績への影響、社会性や市民性の成熟度、人生の目的意識、責任感等々についての調査が盛んである。人間そのものが社会的な生き物である以上、教育は学生の社会的自立をバックアップする使命を負うのであって、高等教育はその最終段階を見届ける重要なポジションを担っている。そしてひとりの学生の未来は、大学でどのような教育的支援を受けるか、そこにかかっていると考える。

大学のキャンパスというのは、畑でたとえるならば、優良な微生物が標本のように整然と棲息している人工的なフィールドである。しかし一歩キャンパスの外に出れば、そこは何倍もの種々雑多な微生物が混在した畑である。多様な生き物たちの綱引きが病害虫の発生を誘発したり、あるいは抑制したりという、ダイナミックな荒畑である。純粋培養された生物がそのダイナミック社会に適応していくために、大学というノアの箱舟に身を置きながらも、何度か外に放たれては遂にオリーブの葉を啜って帰ってきた鳩のように、体験的にリサーチしながら社会に対する接地点を見いだしていく営みとして、このサービス・ラーニングは重要な役割を果たすのである。

ポイントオブライト研究所 (Points of Light Institute) では、学生の市民性育成のためにサービス・ラーニングを導入するに際して、次頁の〈表1〉の6つのカテゴリーに整理した。すなわち支援 (Support)、境界線 (Boundaries)、構造的活動 (Structured Activities)、教育的関与 (Educational Commitment)、積極的価値 (Positive Values)、能力 (Competencies) の各項目である。

表1 学生の市民性育成におけるサービス・ラーニングの役割

カテゴリー	カテゴリーの特徴	実施上の留意点
支援 Support	学生は支援され、家庭・大学・コミュニティを考慮する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人々の有益な関係性を構築する</li> <li>・組織を友好的にし、学生をケアする場所にする。</li> </ul>
境界線 Boundaries	学生についての期待や結果、限界などに関する境界線を明確にする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の期待を明確にする</li> <li>・許容できない行為を許さない学生の自己責任を強調する</li> </ul>
構造的活動 Structured Activities	学生に積極的に構造的な奉仕活動などの機会をもたせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係者と共同でプロジェクトをデザインする</li> <li>・学生の才能を他者へのサービスのために活用する</li> </ul>
教育的関与 Educational Commitment	学生の教育に関与し、高い抱負をもたせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サービスと学習に意図的な関連性を構築する</li> <li>・学生が関心をもつ事柄に学習内容を応用する機会を与える</li> </ul>
積極的価値 Positive Values	他者をケアすることを通して学んだ価値観が、学生自身の道徳的行為を形成することを認識させる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者の必要性を明確にする機会を学生に与える</li> <li>・サービスと価値観の関連性を学生に見つめさせる</li> </ul>
能力 Competencies	学生の間関係スキル、セルフエスティーム、意思決定等に関して生きることに必要な能力やスキルを発達させる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生がサービスを実施する際にその関連スキルを訓練する機会を与える</li> <li>・世界観の中で何かを成し遂げる自己存在である自信を構築させる</li> </ul>

「支援」とは、学生と奉仕先の人々との有益な関係を構築する組織的支援のことであり、初めに学生の現実的期待を明確にさせる必要がある。しかし「境界線」が示すとおり、もしも学生に許容できない行為があった場合にはこれを指導することは重要であり、学生には自己責任があることを強調する。また、学生のリーダーシップを発揮させるためには「構造的活動」を企画すべきである。これは関係者との共同参画を通して学生の才能やスキルを活用することになる。しかもこれらのサービス活動には「教育的関与」が必要である。

このようなサービス活動を通して、学生は他者の必要性に応えることが可能な存在であることを自覚し、コミュニティメンバーの構成員である主体性を学習していく。学生の世



界観において、自分自身が何かを成し遂げることができる自己存在であるという健全な自尊心を構築することで、サービス・ラーニングを導入する大学は、学生の心的成長や人格形成、市民性育成という目標を達成していくことになる。

## 7. キリスト教主義大学の教育的使命

キリスト教主義大学の教育的使命には、「この世界のうめきを聞き分ける傾聴能力とそれを支える『シャローム（全ての人間の尊厳が回復せられ守られた状態）の観点』からの批判的知性の形成」、「共生のマインドと作法の体得」、「ファシリテーターとしての問題解決能力の形成」といった、互いに相関する三つの使命を掲げることができる。そして、その使命のいずれについても、キリスト教的価値観からの規範的方向性をいかに提示しているかが問われることになる。この三つの使命で示される方向性の総体が、キリスト教的価値の応用能力（キリスト教的リテラシー）であると言える。

「キリスト教主義大学は人類の苦しみを避けて通るわけにはいかない。  
神からの離反によって引き起こされている痛み、  
自然界で引き起こされる痛み、人間社会の中で生み出される  
苦しみを看過するわけにはいかない。」(Nicholas Wolterstorff)

そして、大学に集う学生一人一人は利潤を生み出すための道具（人材）ではない。学生はこの世に生を受けた一つの命である。当たり前のことのように思われるが、心からそうだと思うこととはまた別の話である。社会の中に孤立して生きている命はないと言われる。すべての命が他の命と関わり合い支え合って生きている。学生は、学生だけで生きているわけではない。すなわちキャンパスを取り囲む社会全体、うめきをもった世界全体の中で生かされていることを、チャプレン室は絶えずメッセージとして発信し続けるのである。

## 8. 世界のうめきを聞き分ける傾聴能力と批判的知性の形成

ワインの良し悪しを語る際に、ブドウ畑の土壌、地形、気候、風土等、ブドウの生育環境を総称して「テロワール」(Terroir)という言葉が用いられる。ブドウの育つ土地の地質学的性格がワインの味や香りに深い影響を与えるという。このテロワールは、管理システムの行き届いた肥えた畑より、むしろ痩せた土地に育ったブドウが極上のワインになる

ことが少なくないという。貧しい養分を求めてブドウの根は地中深くまで張り巡らされる。その結果として、ブドウは土壌中の様々な微量の元素を取り込み、香りや味がより複雑で奥行きのあるものになるという。しかも嵐にもびくともしないほど太く長い根が地中に張り巡らされるというのである。大学教育は、人の命を支える根をより太く長く人生の土台に張り巡らすための最終段階の教育課程を担う機関である。このテロワールの理解は、桜美林大学におけるサービス・ラーニングのコンポーネントを考える際に十分に考慮される必要がある。世界の貧困問題、搾取、飢餓、人権蹂躪、差別、テロ、その他あらゆる場面で起こる命の軽視や人間らしさの喪失状況とその痛みやうめきは、机上や画面上で調査するだけでは決して分からない。その悲しみやうめきと直接出会うことによって心を揺さぶられ、その深いうめきの中にこそキリストが存在し、愛と癒しの行為が求められていることを、チャプレン室主催のサービス・ラーニング・プログラムでは強調している。

## 9. 従来のキリスト教主義教育への挑戦

「知識による理解」もまた教育においては重要な行為である。大事なことは、そうした知識獲得の方法である。そのことを踏まえながら、以下の点については今後とも検証を継続していかなければならない。

- ① 聖書学や神学の知識注入型教育の限界を認識しているか
- ② キリスト教教育が生きる力、愛する力になっているか
- ③ キリスト教主義大学における人格教育のあり方とは何か

聖書学・神学・キリスト教学の知識の注入や、宗教的環境・宗教施設の整備だけでは、キリスト教主義大学の徳育（霊育）は完結しないし、市民性・公共性の育成はできない。とくに桜美林大学の人間教育は、人格形成もしくは人格の変容を目指すものであり、形成された人格がさらに公共に奉仕するまでに至らなければ、個人と社会の成熟を目指す高次の使命を達成することはできない。しかしながら、ファシリテーター役の教職員に出来ることは限られていることも同時に弁えなければならない。むしろ学生自身の可能性と生命力がサービス・ラーニングの効果を最大限に引き出すのだということを知る必要がある。サービス・ラーニングの主人公は教職員でもなければ派遣先のフィールドでもない、主人公は学生である。教職員が学生を育てているという理解は、サービス・ラーニングには当てはまらない。ファシリテーターとしての教職員に出来ることはあくまでも、学生が自ら経験する様々な出会いと発見のサポートをするだけである。

いずれにせよ、従来の情報伝達型教育に対し、問題提起型教育の新しい教育方法へのアプローチが求められるので、従来のスキルやノウハウとは全く異なるものを体得していく必要がある。しかもそれは、単純にノウハウが異なるだけではなく、価値観として対極に位置するため、従来の指示/命令/管理といった価値に支えられた「教職員の言動所作」や「学校的な時間観・空間観」に至るまで、従来のスタイルを乗り越えて、大学教育プログラムに新しい学習スタイルが提案されることになる。

## 10. 考察と提言

### 10.1 神の国の福音をより豊かにイメージするものとして

「神の国の福音が教育をともなう」ということを、イエスのガリラヤ伝道の記事に見いだすことができる。

**「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。」(マタイ 4:23)**

イエスの宣教が、Teaching, Preaching, Healingであったことが記されている。注目すべき2つの点は、イエスが会堂で「教えられた」ということ。また、教えることにとどまらず、相手のところへ降りて行き、問題を共有し、課題を共に担おうとされたということである。桜美林学園の創立者が身をもってそれを実践したように、「神の国の福音」の本質は、人々と出会い、その人々の労苦を具体的に担うところに見いだされるものであるということである。イエスも旧約以来の伝統をもつユダヤ人の中に自分から入って行き、活動をされた。つまりイエスは自らユダヤ人としての歴史的責任を自覚し、同胞のために新しい教えの立場から教えられ、議論をされたと思われる。これを今の教育の現場に置き換えて考えるならば、諸会堂はありとあらゆる教科を教える大学の教室とも見立てることができる。しかも桜美林大学における教育の本質は、単に教科を教えるにとどまらず、コミュニティに出向き、人々と出会い、地域の課題や問題を共に担う中でこそ、教室で学んだ知識やスキルを真に活かすことができるという理念を、崇貞学園の時代から受け継いでいるという点にある。「福音が教育をともなう」ことの所以がここにあり、イエスが「民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」ことに改めて注目し、桜美林大学の教育課題としなければならないと思う。桜美林学園は学生の人格形成を目指すことはもとより、形成された人格が更に隣人や社会に奉仕するまでに至らしめることにその教育目的がある。「神の国の福音」を豊かにイメージしながら、個人と社会の互恵的な成熟を目指すところにその本来的使命を見いだす。桜美林の建学の精神はまさにここに極まるのではなかろうか。

現代の子どもたちは、大学生になっても自分が隣人や社会のために役立ちうる存在であ

るとの自覚をもっていない場合が多い。例えば、高齢者の話し相手や聞き手となり、ちょっとした身の回りの手伝いをするのがいかに喜ばれるか。また、障がい者施設で重度の障がいをもった人たちとの間で言語という手段を超えたコミュニケーション体験を通じて、いかにして双方が魂の交流を経験できるか。あるいは、途上国の人々への様々なサービス体験を通じて、いかに物質的な価値観を越えた真の充足感を得ることが出来るか。

コミュニティ活動が諸外国に比べ盛んではない日本では、サービス・ラーニングは多くの学生にとって全く新しい体験となる。

## 10.2 アカデミック領域とサービス領域の連携

体験型教育によって得られる様々な出会いを通して「生きる力」が育まれていく。体験型教育は、人間の生きる力の源泉となると言えよう。

アカデミック領域とサービス領域の連携は、例えるならば異種の苗である米と麦を同じフィールドに直播きし、そこで芽生え育った米と麦を刈って、その藁をフィールド全体に再び散らすことによって、土壤環境（社会）を改善していく自然農法と同じである。言ってみれば「アカデミック種とサービス種の連携耕起直播き教育」なのである。

桜美林大学における有機的な教育は、サービス・ラーニングを通じて、そのような卓越したものを実践的に学ぶことを目標に方向付けられ、学生の興味や満足に対する配慮を超えて、質的に価値あるものに対する配慮に重点が置かれるべきである。信仰的使命感をもって公教育に携わるキリスト教主義大学は、公教育のために信仰的使命感を譲歩すべきではない。むしろ社会に対して、クリティカルな立場で在り続けるのがキリスト教サービス・ラーニングのスタンスであると考えらる。

サービス・ラーニングの教育的効果は、すぐに数値として表れてくるわけではない。期待される効果を無理にでも引きだそうとあせってはならない。果実としてのりんごの収穫においても、全ての花の数だけ実を結び収穫出来るわけではないと言われる。農業においても歩留まりというものがあり、農薬や化学肥料で管理する方法ですら一定の割合で発生するが、ましてや自然農法に近づけば近づくほど、歩留まりの低さは考慮される。サービス・ラーニングも同じで、学習展開のコンポーネントを緻密に管理すれば、歩留まりは一定の高いレベルを維持するであろうが、これが常に成績評価の対象であることが意識されるようなカリキュラムであった場合、歩留まりの割合は数値的には良好であっても、本来の土壤改良（社会改良）への真の内発的エネルギーを耕起させる機会を逸してしまう恐れがあろう。サービス・ラーニングの学びには、弾力のあるコンポーネントの構築が必要とされる。自然農法においても、多種多様な生物が棲むようになって、畑の生態系が時間をかけてより弾力のある安定を獲得していくと言われている。一回の出会いと体験ではなく、多様なフィールドにおける経験が積み重ねられていく中で、より高次の教育的成果を生み

出していくことになる。

繰り返し打ち寄せる波が海岸の地形を変えるように、多様な出会いと経験が、学生一人一人の人格をより柔軟で強靱なものへと形成せしめることになるであろう。

### 10.3 大学間の相互協力体制の構築をめざして

サービス・ラーニングが持続性のあるプログラムとして展開していくためには、参加する学生のモチベーションや責任感が必要であるばかりでなく、学生を受け入れるサービス・エージェンシーの理解と協力に負う部分が大い。したがって大学当局と受け入れ機関との継続的な協力体制は、より良いプログラムをつくる上で不可欠である。

最近ではそうした受け入れ機関の相互協力関係が強化される方向にあるが、一方で大学間の相互協力関係は、日本国内ではまだその声を聞かない。今後、サービス活動の実施面においても、政策立案、問題意識の提示の上でも、サービス・ラーニングを取り入れた大学間の相互協力の強化が課題となるであろう。キリスト教主義の教育理念を共有できる大学同士で共同プログラムを立ち上げていくことは優先的に取り組むべき課題であると考えている。大学を越えた学生同士の知的研鑽ならびに実際のサービス活動やリフレクションを分かち合うことを通して育まれる友情は、学生の将来にとって得がたい財産となり、将来の進路選択の上でも大きな役割を果たすと思われる。持続可能な社会の形成のために、大学全体に拡がりをもったプログラムを構築していくことは現代の社会的要請でもある。

## 11. まとめ

### 11.1 物語性をもった臨床教育プログラムとして

サービス・ラーニングは、一部の教育者の趣味・嗜好から生まれたものなどではない。現代社会の病理と課題に深く根ざし、その解決を目指す自己変革と社会変革への意志から生まれてきた必然的な試みである。知識の高度化は単にエリートの保身や持てる者の飽くなき利益追求にのみ使われているのではなからうか。今の大学の知識は、社会矛盾の解決に真に有効な手だてを示し得るのか。学生の人格形成を真剣に考え、正しく導いているのか。この問題提起は、既存の大学の知識、教育研究活動、そして大学人へのラディカルな批判ともなっている。積み重ね型、焼き直し型の現代の学術のあり方が、深まる社会の矛盾を前にして、大学はまさに「知の組み替え作業」を迫られているところでもある。価値の明確な枠組みが希薄になった時代にあっては包括的な知識と同時に、教育母体であるキリスト教主義大学がその教育基盤を鮮明にし、そこに到達するプログラムを具体的に展開していく必要があると考える。中村雄二郎は普遍性・倫理性・客観性を重視する近現代の

学術に対して、物語性・象徴性・演出性にシフトした「臨床の知」という考え方を示した。サービス・ラーニングはまさにこの世界を具体的にどのようにイメージすべきかを我々に問うている。どのような社会のあり方を我々は物語り、イメージしていくのか。そのイメージがシャローム（平和）を象徴するものとなるならば、それは我々の日常生活の中に演出され、具体的な行為となってコミュニティに平和を実現する「知」となるであろう。

本報告の最後に、桜美林学園チャプレン室におけるサービス・ラーニングの定義（試案）を述べさせていただくことをお許し頂きたい。

#### 桜美林学園チャプレン室が定義するサービス・ラーニング

「学生が、社会貢献活動を通じて人々と出会い、対話を重ね、諸問題を共に学ぶ経験をする中で、願わしい社会のあり方を物語り、平和的コミュニティの実現へと協働していく、一連の有機的な過程を総称する臨床教育プログラムである。」

### 11.2 「生きる力」と「何かを始めるチャンス」を提供するものとして

今日の大学教育の現場においては、多様化する情報社会の中で翻弄された若者が未来への展望や期待感をもつことが出来ず、生きる目的を見失い、生きるエネルギーすらも減衰させている状況がある。多くのキリスト教主義大学の現状は、麗しくも抽象的な建学の精神が絵に描いた餅として、具現化・実質化されることなく放置されている実情も散見される。そのようなキリスト教主義大学としての生命線を死守するための厳しい闘いが、日夜、教育現場において繰り広げられている状況の中で、サービス・ラーニングは、将来、総合的・学際的プログラムとして生起され、理念と学問と実践を融合させた新しいアカデミック・スタイルとして推奨されることが想定される。とりわけ桜美林大学においては、学生の人格形成・心的成長・市民性育成のサポートを通じて「建学の精神」の浸透を図り、平和を希求するクリスチャニティの理想をより豊かにイメージする臨床プログラムとして、人間形成教育の中心に据えられていくことを願っている。

混迷する時代にあって、キリスト教主義の浸透の一つの方向性が<図3>に示されるサービス・ラーニングの概念構造に内包された協働性 (Collaboration) と統合性 (Integration) の中に見いだされるのではないだろうか。

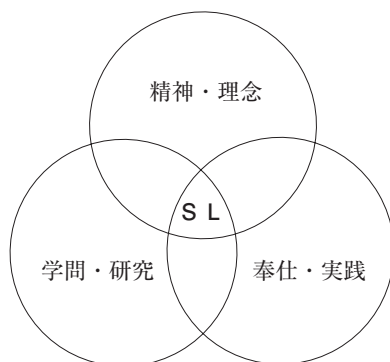


図3 サービス・ラーニング (SL) の概念構造

私たちのこの世界やコミュニティは尊い学びの場であり、市民性公共性の強力な磁場でもある。そこで自発的に無償の貢献活動体験をすることで、自分の存在価値も認識され、自分の生きているこの時代、この歴史の中における人生設計や独自の世界観の構築へと導かれていくことになる。

政治哲学者ハンナ・アーレントは、「人間は何かを求めることができる。何かを始めることから奇跡を起こすことができる」と言っている。サービス・ラーニングはまさに学生たちにその「何かを始める」ためのチャンスを、各自の「求め」に応じて提供するプログラムである。学生たちがやがて偉大な「奇跡」を起こしてくれることを我々は期待したい。

### 参考文献

- アーレント, ハンナ (1994) 『人間の条件』(志水速雄訳) ちくま学芸文庫  
 青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター編 (2004) 『キリスト教と人間形成』  
 (ウェスレー生誕 300 年記念) 新教出版社  
 有本章 (2003) 『大学のカリキュラム改革』 玉川大学出版部  
 文春新書編集部編 (2008) 『論争 若者論』(文春新書 665) 文藝春秋  
 デューイ, ジョン (1975) 『民主主義と教育 (上)』(松野安男訳) 岩波文庫  
 深谷松男 (2009) 『キリスト教学校と建学の精神』 日本基督教団出版局  
 学校伝道研究会編 (1997) 『キリスト教学校の再建』 聖学院大学出版会  
 学校伝道研究会編 (2006) 『キリストの形成とチャレンジ』 聖学院大学出版会  
 本田由紀 (2008) 『軋む社会 教育・仕事・若者の現在』 双風舎  
 池住義憲 (2004) 「参加型学習とは何か—より意味のあるファシリテーターになるために」  
 『助産雑誌』 58(1) 医学書院  
 稲垣久和・金泰昌 (2006) 「宗教から考える公共性」(公共哲学 16) 東京大学出版会  
 伊藤悟 (2008) 「キリスト教教育プログラムとしてのサービス」『モラル教育の再構築を目指して  
 (青山学院大学総合研究所叢書)』 教文館  
 木田献一 (1991) 『平和の黙示—旧約聖書の平和思想』 新地書房

- 絹川正吉・館昭編（2004）『学士課程教育の改革』（講座「21世紀の大学・高等教育を考える」第3巻）東信堂
- キリスト教学校教師養成事業委員会編（1991）『キリスト教学校教育の理念と課題』キリスト教学校教育同盟
- 小玉重夫（2003）『シティズンシップの教育思想』白澤社
- 国際基督教大学サービス・ラーニング・センター編（2009）『国際サービス・ラーニングの展開と連携構築－実践型国際教養教育のアジア・アフリカネットワーク形成－事業報告書（平成17-20年度）』国際基督教大学
- 倉松功（2004）『私学としてのキリスト教大学 教育の祝福と改革』聖学院大学出版会
- 倉本哲男（2008）『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究－サービス・ラーニング（Service-Learning）の視点から』ふくろう出版
- 溝上慎一編（2004）『学生の学びを支援する大学教育』東信堂
- 溝上慎一編（2008）『自己形成の心理学 他者の森を駆け抜けて自己になる』世界思想社
- 中村雄二郎（1992）『臨床の知とは何か』岩波新書
- 西尾隆編（2007）『サービス・ラーニングへの誘い（サービス・ラーニング研究シリーズ3）』国際基督教大学サービス・ラーニング・センター
- Points of Light Foundation（2000）“A Practical Guide for Developing Agency,” *SchoolPartnerships for Service-Learning*, Points of Light Foundation.
- ロバート・M・ハッチンズ（1968）『教育と人格』（笠井真男訳）TBSブリタニカ
- 佐々木正道（2003）「アメリカの大学におけるサービス・ラーニング」佐々木正道編『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房
- 佐藤郡衛（2001）『国際理解教育－多文化共生社会の学校づくり』明石書店
- 田中智志（2005）『人格形成概念の誕生』東信堂
- 寺崎昌男（2008）『大学改革 その先を読む』東信堂
- 東方敬信（2009）『生きるための教育 教育人間学とキリスト教』教文館
- Wolterstorff, Nicholas. (1983) “The Mission of the Christian College at the End of the Twentieth Century,” *Reformed Journal* 33 (6).
- 魚住忠久（2000）『共生時代を拓く国際理解教育』黎明書房